

若竹ミュージカル

コンサート

『若竹ミュージカル 12 年の軌跡』



東京学芸大学附属養護学校
卒業生・家族・教員、支援者
若竹ミュージカルオーケストラ

指揮：広井 隆

『若竹ミュージカル 12年の軌跡』

台本・演出：若竹ミュージカル演出部



東京学芸大学附属養護学校
卒業生・家族・教員、支援者
若竹ミュージカルオーケストラ
指揮：広井 隆

2005年11月6日（日）
開場：13：20
開演：14：00～15：30
会場：東京学芸大学芸術館

「若竹ミュージカル物語」コンサート

工藤傑史（東京学芸大学附属養護学校）

本日は「若竹ミュージカル12年の軌跡」コンサートによろしくお出で下さいました。

1993年に本校卒業生の「余暇・文化活動」の一つとして始めたミュージカル活動が、支援者の輪の広がりとともにいつしか「生涯学習の場」と呼ばれるようになり、3つのミュージカル作品をレパートリーにするまでになりました。そして、この5月には念願だった「若竹ミュージカル」の歩みを記した本『僕たちのブロードウェイ』（晩成書房）を出版することができました。

今や「若竹ミュージカル」は私たちの生活の一部になったといっても過言ではありません。毎月2回の練習に休まず通い続ける卒業生の姿を見るにつけ、この活動の土台となっている学校時代の学芸会の頃からずっと応援して下さった故・大井清吉先生（東京学芸大学名誉教授）の「障害児・者の表現活動を育てることは、障害児・者が自らを解放することにつながる」ということばを思い出します。

今回のプログラムは、私たちがこれまで取り組んできた3つのミュージカル作品、『サウンド・オブ・ミュージック』（1993年～1996年、1998年～2001年）、『ウエスト・サイド・ストーリー』（1996年～1998年）、『屋根の上のヴァイオリン弾き』（2001年～2005年）から、大好きだった曲や大切に歌い続けてきた曲を選んで、それを若竹ミュージカルの成り立ちや歩みを表す5つのキーワード〈1. プロローグ、2. ファミリー、3. ラブストーリー、4. 結婚式、5. 希望〉で構成してみました。別名「若竹ミュージカル物語」コンサートということができるでしょうか。

一つひとつの曲の中に込められた思いと、その中で最高に輝く卒業生とその仲間たちといっしょに、どうぞ最後までお楽しみ下さい。

（若竹ミュージカル代表）

「出会い」

大串清文

「若竹ミュージカル」。ここに集うまでには、キャスト、スタッフ、オーケストラ、メンバーそれぞれに、いくつもの“出会い”の結集があると思います。

12年前の春、東京学芸大学に入学した私は、“東京学芸大学管弦楽団”に出会い、その年の秋、附属養護学校との“音楽教室”に出会いました。さらに振り返れば、高校での“コントラバス”、“吹奏楽部”との出会いが、私にとっての若竹ミュージカルへと続く道の原点なのかも知れません。そして何より、“広井先生”、“オーケストラの同期の仲間”との出会い……かけがえのないものです。

“夢こそは生きる証。愛を守り育て誓う。”“ともに見つめあい。ともに生きる。”「若竹ミュー

ジカル」で出会う音楽、その音符や歌詞が100名を数えるメンバーの力で音になり、それぞれのメンバーの想いが飾りなく真っ直ぐに表現されるとき、演奏している私自身も、大きく気持ちを揺さぶられ、涙することがあります。この12年でたくさんの感動を、その時々メンバーで共有してきました。

「若竹ミュージカル」の活動はもちろん今日のような公演も大事、けれども、月2回の練習こそがより大事な時間であると強く感じます。ひとつのものをたくさんの仲間で作る。この作る時間こそが、「若竹ミュージカル」の出発点である、互いに学び合う場、互いに理解し合う場、自分を表現する場であり、このことを考えるといまの若竹ミュージカルオーケストラのあり方に、私の責任として、自分自身で疑問符をつけなければならない現実があります。限りなく続く「若竹ミュージカル」のオーケストラとして、いままで以上に作る時間を大切にするため、若竹ミュージカルオーケストラでは広くメンバーを募っていきます。さらなる「出会い」を求めて。

今日の小金井祭公演でも、新たな「出会い」があることを願って、ご挨拶にかえさせていただきます。

（若竹ミュージカルオーケストラ 代表）

「思い出のアルバム」

小島訓子

本日は、お忙しいところ小金井祭公演にお出で下さりましてありがとうございます。

お陰様で、5月8日に行いました『屋根の上のヴァイオリン弾き』の集大成としての公演を、多くのお客様に観て頂くことができ、私達は大きな達成感を憶えました。若竹ミュージカルは発足してから12年を迎えました。その間に『サウンド・オブ・ミュージック』『ウエスト・サイド・ストーリー』『屋根の上のヴァイオリン弾き』と大きな3つの作品を取り上げ、それらを通して「愛」「平和」「自立」等多くの事を学びました。その事は卒業生本人だけでなく、長い人生を送ってきた保護者である私たちも、新鮮な思いでこれらのことを学んだのです。

その学び中で、私が一番大切と感じているのが「愛」です。わが子たちが、社会がどう変わろうとも、人を愛し、仲間を信じ共に生きていけるようになって欲しいと思っています。この先もわが子たちが、ミュージカルやオーケストラの仲間とともに、生き生きした毎日が送れるように親として出来ることをやっていきたいと思っています。

“ふいつのことだか、思い出してごらん、あんなこと、こんなことあったでしょう……”今回の公演「若竹ミュージカルの12年の軌跡」は卒業アルバムのようなもの、みんなで思い出にひたり、そして、また次へ向かって飛躍していくというのがコンセプトです。精一杯12年間やって来たことを、今回の舞台で観て頂きたいと思います。そして次に踏み出す若竹ミュージカルの未来を暖かく見守って頂きたいと思います。

（保護者代表）

プログラム構成・曲の紹介

1. プロローグ

♪ **伝統（しきたり）の歌（Tradition）** <屋根の上のヴァイオリン弾き>より
－ アナテフカ村に住むユダヤ人の主人公デヴィエと村人たちの歌－
帝政ロシアの頃、忘れられたような寒村アナテフカ村にすむユダヤ人達が、昔から引き継がれてきた「しきたり」について口上を述べます。

それは、若竹ミュージカルの12年間の軌跡にも通じます。この5月に東京公演での若竹ミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』のプロローグでコンサートの幕開けをします。

2. ファミリー

若竹ミュージカルに欠かせない存在・・・「縁の下力持ち」お母さん達の歌声です。始めは「子ども達だけでは不安・・・」と言ったのが、今では「共にミュージカルを作る仲間！」と。お母さん達にはお母さん達の表現があります。

♪ **朝の賛美歌／アレルヤ** <サウンド・オブ・ミュージック>より
♪ **マリア**

－ ノンベルク修道院のシスター達－
シスター達が朝のお祈りの歌をおごそかに歌います。
シスター達の悩みの種、見習い修道女のマリア。心配したり、困ってしまったり、それでも可愛いマリア・・・とシスター達は、歌います。

♪ **アメリカ** <ウエスト・サイド・ストーリー>より
－ 下町にすむ人たち、ジェット団・シャーク団の若者達－
一変して、ここはアメリカ、ニューヨークの下町。夢を持って移民してきた人々・・・でも現実。いがみ合いながらも、たくましく生きる人たち。そのパワーを全開して歌い、踊ります。

3. ラフストーリー

お母さん達のパワーに負けじと、卒業生メンバーが「一番好きなこと・・・」を表現します。「舞台の上では、思いっきり愛を語りたい。」
今まで演じてきた演目には。素敵な恋がありました。

♪ **もうすぐ17才** <サウンド・オブ・ミュージック>より
－ リーズルとロルフ 歌とダンス－
トラップ大佐の長女リーズルと郵便配達人のロルフは、「憧れに恋をする乙女・・・」と歌います。恥じらいながらも初々しい二人の恋心に、自分の思いを重ねてみました。

♪ **トゥナイト** <ウエスト・サイド・ストーリー>より
－ トニー（ジェット団）とマリア（シャーク団リーダーの妹）－
対立するグループの二人が愛し合い、歌います。純粋な愛を「永遠にあなただけ見つめ」「あなたしかいない・・・ほくも同じ思いさ」「マリア、マリア・・・トニー、トニー」と歌い上げます。

4. 結婚式

<屋根の上のヴァイオリン弾き>より

愛し合う二人は、やがて結ばれます。三つのミュージカルでそれぞれの結婚式を演じました。ここでは、<屋根の上のヴァイオリン弾き>の結婚式の場面を再現します。

デヴィエの長女ツァイテルと仕立屋のモーテルの結婚式。しきたりに則り村人達が総出で祝い、歌います。

♪ **陽は昇りまた沈む（Sunraise, Sunset）**
－ デヴィエとその妻ゴールド、次女ホーデルとキエフの学生パーチェック－
「あの幼子が、こんなに立派になって・・・」と、二人の幸せを願い、感慨深く歌うデヴィエとゴールド。二人の晴れ姿に自分たちの将来を重ねて歌うパーチェックとホーデル。

♪ **ビンの踊り（Bottle Dance）**
－ 村人、ボトルダンスの人－
祝宴の音楽が始まり、クラリネットが高鳴る。その音色に誘われて、ワインボトルを頭に掲げ、ダンサー達が登場。勇壮な「ボトルダンス」を踊ります。

お祝いの品物の披露など、「しきたり」通りに進む結婚式に業を煮やして飛び出したパーチェックは、意中の人ホーデルにダンスを申し込みます。祝いの席は大騒ぎになりますが、司祭様の「男と女と一緒に踊ってはならぬ・・・とは書いておらんなあ」のことに力を得て、デヴィエ達も踊り始めます。

♪ **結婚式の踊り（Wedding Dance）**
－ デヴィエ一家・司祭様・村人達－
司祭様まで踊り出したのを見て、村人達も男女で一緒に手を取り合って踊り始めます。

人々が楽しく踊り浮かれているところへ、巡査部長が部下と共にやってきて会場をメチャメチャにして引き上げます。「デヴィエ、すまん。命令なんだ」と告げて去ります。残されたデヴィエ一家は茫然自失。

5. 希望

物語の主人公達の人生は、けして順調ではありません。彼らは傷つき、悩み、苦しみます。でもけしてあきらめません。いつでも希望だけは失わず、前を向いて歩いていきます。

♪ **恋は永遠に（Somewhere）** <ウエスト・サイド・ストーリー>より
－ マリア－
争いに巻き込まれて死んでしまったトニーを抱き、マリアは平和で静かな世界を求めて歌います。「いつか、どこかに・・・」と希望を持って歌います。

♪ **すべての山に登れ** <サウンド・オブ・ミュージック>より
－ トラップ一家・マリア、シスター達－
故国オーストリアを愛するトラップ大佐・マリア・子ども達に追跡の手が修道院まできます。「山は汝の歌の前に扉を開くでしょう。」修道院長の祈りを受けてトラップ一家は、自由の国スイスをめざして力強く山道を登っていくのでした。

注) ♪ <<歌>> 一歌う人－
♫ <<踊りの曲>>
(演出部：三輪禎子、山本正子)

〈これまでの公演より〉



← 1994.11.3 小金井祭参加
第1作『サウンド・オブ・ミュージック』

1997.10.11 三鷹市公会堂
第2作『ウエスト・サイド・ストーリー』 →



← 2000.10.9 所沢市ミューズ
第3作『サウンド・オブ・ミュージック』全幕

↓



← 2005.5.8 武蔵野市民文化会館
第4作『屋根の上のヴァイオリン弾き』



〈今日の日をめざして〉



♪ 「もうすぐ17才」



「アメリカ」のダンス



オーケストラの音色も研ぎが掛かって



「シスターの歌声」



「愛してるわ アントン」
「愛してるよ マリア」



♪ 永遠にあなただけ見つめ・・・♪
マリアとトニーのデュエット

わたしの好きな曲、思い出の曲は・・・

「もうすぐ17才」

30 回卒 伊藤公一

ロルフとリーズルが雷が鳴って白い家に飛び込みました。そして「もうすぐ17才」の歌を歌って、ふたりで踊りました。僕は映画のこの場面が好きです。ザルツブルグでこの白い家を見ました。ロルフの衣装を着てガラスの窓から中を見ました。僕もあんな風に踊れたらいいと思いました。今度はソロのダンスをします。本当はロルフで歌も踊りも全部やって、映画みたいにやってみたいです。

「マリア」の思い出

伊藤敬子

「伊藤！遅い」 広井先生の大きな声が飛んできました。「あの子はほんとに・・・」歌い出しが出遅れたのです。心臓がバッカン、バッカン高鳴り目の前が暗くなりかけた、その時「すみませーん」と上手の袖から息子の声が聞こえてきました。ソロ体験者の彼が思わず発した親子逆転劇の場です。きつとハラハラドキドキしながら見ていたのでしょう。忘れられぬ一瞬でした。若竹ミュージカル12年間の積み重ねは親子の粋を取り除き、同じ演技者としてお互いの立場を理解し合い、競い合い、多くの共通した学びをさせてくれたのです。

上田恭子

約40年前、映画『ウェスト・サイド物語』を観て、NYの街・音楽・若者のダイナミックなダンス等の場面ストーリーにそれまでと違った感動を覚え暫く座席から立てなかったことを、若竹ミュージカルで『ウェスト・サイド・ストーリー』を公演した時に思い出していました。今春、NYのリンカーンセンターを訪ねた折、その場所がかつてはロケ地であったと聞き、映画の場面が蘇りました。今回の公演で「アメリカ」「トゥナイト」「恋は永遠に」の曲を歌うことになり、再び青春時代とNYを思い出しています。

27 回卒 上田 徹

ビデオを何回も何回も見ているうちに、「すべての山に登れ」を仲間と一緒に楽しく口ずさむことができるようになりました。

「人生に乾杯」

21 回卒 植田久

『ウェスト・サイド・ストーリー』『サウンド・オブ・ミュージック』『屋根の上のヴァイオリン弾き』とやってきた中で沢山好きな曲はあるけれど、一ばん好きな曲は、とくに「人生に乾杯」と言う歌で、この歌は絹川さんのソロで盛り上がった所でみんなをリードしてくれる。テンポがだんだん早くなり、オーケストラが又もりあげてくれる。この高まりが、何ともすきなのです。なぜかと言うとロシアとユダヤの人たちが力をあわせ「つらい時でも明るくいこう」と、みんなが元気をもらえるすばらしい歌なので、ぼくはとても好きなのです。

大串千代

『ウェスト・サイド・ストーリー』の公演では、奏者として参加していた。今は、子どもと一緒に夫の練習について行っている。『屋根の上のヴァイオリン弾き』の公演の練習の頃より、5歳の息子が、

自らの意思で練習を見学し、夢中になり、曲に合わせて手拍子を打っていることがある。自宅に帰っても“ウェディングダンス”を口ずさむ。3歳の娘は、『サウンド・オブ・ミュージック』の“ドレミの歌”を耳にして、「知っているよ」と嬉しそうに言う。音楽を通じて、多くの方々と知り合い、共に時間を過ごしていけるのはありがたいことと思う。

27 回卒 小野寺邦江

私は歌が大好きです。「ドレミの歌」が好きです。ドはドライブのドです。皆で作ったので楽しいドレミになりました。「17才の歌」も好きです。家でいつもお母さんと一緒に歌っています。ミュージカルの歌はみんな好きです。私が病気になって歌えなくなった時はお母さんがたくさん歌ってくれました。又行けるようになった時はうれしかったです。お母さんはもっともっとうれしかったと言います。今日も「ドレミの歌」を一生けんめい歌います。

「すべての山に登れ」

小野寺恵江

若竹ミュージカルにお世話になり沢山の素晴らしい歌に出会わせて頂きました。今回のコンサートの中でということですが、「すべての山に登れ」は私達親子には特別の思いがあります。喜びの山、悲しみの山、苦しみの山、何度登り降りして来たか分かりません。時には涙を流しながら、子どもが元気な時は楽しく歌い、歌に励まされ癒されて乗り越えて来られたように思います。これからも厳しい事があると思いますが一つでも多く喜びをみつけ手を取り合って歩んで行きたいと思います。ミュージカルに関わって下さる多勢の皆様に励まされ支えて頂きながら子どもが喜んで行けることを願って居ります。

「朝の賛美歌／アレルヤ」に寄せて

加藤富美子

私は『屋根の上のヴァイオリン弾き』から若竹に参加したので、『サウンド・オブ・ミュージック』『ウェスト・サイド・ストーリー』は、今回の公演で初めて歌います。でも、どうしてか初めて歌う気がしないのです。それは、かつて観客の一人として若竹の舞台の一挙手一投足、音の一つ一つに釘付けになってきたからだと気づきました。あの尼僧たちの清冽で暖かな歌声を思い起こしながら、そして今、それを舞台上の一人として歌える喜びを胸に、「朝の賛美歌／アレルヤ」の響きをつくっていきたいと思います。

『サウンド・オブ・ミュージック』

25 回卒 木村智子

わたしは、ミュージカルの中でステキな曲のいっぱいある『サウンド・オブ・ミュージック』がいちばん大好きです。今までにいろいろなところで何度も『サウンド・オブ・ミュージック』のミュージカルを見ました。いちばん気に入っているところは、♪ラーラーラーラー♪という、はじまりのところです。オーケストラがこの曲を弾くともう胸がドキドキして、3年前にお母さんと二人で行ったスイスの山々を思い出して、胸がいっぱいになります。7月のピアノ発表会のときにも、リクエストして先生と一緒にこの曲を弾くことが出来ました。とってもうれしかったです。こんど、マリアのいた修道院や音楽会のあったザルツブルグに行きたいなと思っています。

「陽は昇りまた沈む」

小島訓子

「♪いつもおんぶしてた、かわいい小さな子・・・」なんと嫁がせる娘への思いが詰まった歌なのか。昔、この歌を初めて歌ったとき、親は嫁がせる時こんな思いだったのかと、無性に親が懐かしく有難く思った。そして長男の結婚式の日、何故かこの歌が耳に響き、「大事なわが家の家族です！」と熱い思いで叫びたくなったことを思い出す。この歌を歌うたび、綿々と続く人類の営みに感謝と畏敬の念で一杯になるのです。

ぼくの好きな曲は「もうすぐ17才」

小島諭

ぼくは、もうすぐ17才がスキです。ロルフとリーズルがダンスをおどります。ぼくも小野寺さんとおどります。ダンスをするとうれしいです。たのしいです。きもちがいいです。

「ドレミの歌」

近藤和子

みんなが知っている「ドレミの歌」は大好きです。はじめてさと子と外国旅行に行ったのがザルツブルグでした。ミラベル庭園に着いた時は大感激！、映画のシーンを思い出し、思わずドレミの歌を口ずさんでいました。旅行社の添乗員の方が、映画を3回も見に行ったというほど『サウンド・オブ・ミュージック』の大ファンとのことを聞き、うれしくて若竹ミュージカルのことをお話しをしましたら、予定になかったモントーゼの教会に連れて行って下さいました。結婚式のロケ地だったそこはとても美しい所でした。いつかミュージカルの皆で行って歌ってみたいです。

25 回卒 近藤さと子

私は「もうすぐ17才」のうたがスキです。

「すべての山に登れ」

近藤由紀子

この歌が始まると私はいつもこみ上げてくるものがあってウルウルしてしまいます。何事もない平坦な道である事を望みながら、誰もがいくつもの山を乗り越えて歩んできたことと思います。大きな陰しい山でも家族の支えや友人の励ましがあれば越えていく事が出来ますが、山が小さくても一人で越えて行こうとする時は大変心細く不安なものです。この歌は困難に立ち向かう勇気を私に与えてくれる人生の応援歌なのかもしれません。

「トウナイト」

27 回卒 近藤由里

わたしは「トウナイト」の曲がいちばんスキです。こころのなかがあつくなります。(わかったわ！だからいつもこの曲を歌う時、胸に手をあてるのね)
このうたのなかで、いちばんスキな歌詞は「すてきなゆめ あなたに」のところ。

清水美恵子

30年以上前の青春真っ盛りの頃『サウンド・オブ・ミュージック』、『ウエスト・サイド・ストーリー』この2作品が公開されました。映画はそれぞれ3回観に行き、レコード(その頃はLP)を買って、歌詞を見ながら何度も何度も歌いました。それが40年近く経った今になって、思いがけなくこんな素晴らしい形でめぐり合えることになり、しみじみした思いに駆られています。青春の思い出の歌が、今度は娘との共通の思い出の歌になります。

「もうすぐ17才」

30 回卒 清野友規

ぼくは、こんど、「もうすぐ17才」を歌います。栗山君と戸田君と三人で歌います。一生懸命練習しています。大きな声で歌えたら、うれしいです。

「すべての山に登れ」

清野三千子

「生きて行くという事・・・」で始まる「すべての山に登れ」私は、今まで、この歌を舞台できちんと歌えた事が無い。歌い始めると、障害を持った子供と一緒に歩んできた諸々のことが走馬燈のように頭に浮かび、声が詰まってしまう。本当に、沢山の山を越えて来た、山を越えられた喜びが生きる力の糧となり、今の私がある。私達親子の一番大きな夢は何だろう？それは、障害者も普通に生きられる一般社会の実現以外には考えられない。これからも、この夢に向かって、又、一歩ずつ歩もう。「さあ、登ろうすべての山！」今度の公演では、力強く、歌いたい。

「アメリカ」

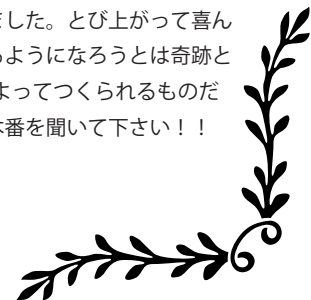
藤江もと子

アメリカにあこがれてやって来たものの豊かで幸せとは言えぬ暮らしをしている人々、故国は懐かしくともアメリカに留まるしかない現実、その心情がかぎりなく切なく響いてくるがこの「アメリカ」です。歌っていると登場人物にダブって、空腹をかかえてアメリカを夢見ていた敗戦直後の自分自身や、洪水の街ニューオーリンズに残された人々が浮かんできます。アメリカは本当にあこがれの国、希望の国なのでしょうか。

「もうすぐ17才」

盛生桂子

先日11月6日公演にむけてのオーディションがありました。歌とダンスにわかれてでした。正子は何んとしてもソロで歌いたいとかなり強行でした。そして見事に花丸がつきました。とび上がって喜んでおりました。私もびっくり仰天、言語の障害を持った娘がここまで歌えるようになるうとは奇跡としか思えません。12年の努力の結果だと思えます。そして奇跡は、努力によってつくられるのだとしみじみ痛感しました。只今毎日の様に家でも練習に励んでおります。本番を聞いて下さい！！



若竹ミュージカルの沿革

1993. 7 東京学芸大学教育学部附属養護学校
開校40周年記念若竹ミュージカル 発足
1993. 8.1 第1回オリエンテーション
演目決定 『サウンド・オブ・ミュージック』
1994. 1.15 ラジオジャパンにて1月9日の練習風景放送
1.16 若竹会新年会にて、歌を披露
1.22 東久留米市にぎやかカーニバル出演 (於 東久留米市中央公民館)
1994. 6.15 開校40周年記念式典行事参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
8.6～7 合宿練習 (於 養護学校)
10.16 若竹まつりにて『サウンド・オブ・ミュージック』上演
11.3 小金井祭 (東京学芸大学学園祭) 参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
『サウンド・オブ・ミュージック』公演
東京学芸大学管弦楽団と共演
(NHK ニュース及び「NHK こどもの療育相談」に取りあげられる)
12.1 東久留米市にぎやかカーニバル出演 (於 東久留米市中央公民館)
1995. 6 若竹ミュージカルを上演する会発足
9 9月より正嘉昭先生から演技指導を受ける
11.2 福祉文化学会主催福祉文化総大会参加 (於 横浜ラポール)
12.1 座談会—ミュージカルが「癒す」もの— (演劇と教育 1996年3月号掲載)
12.9 東久留米市にぎやかカーニバル出演 (於 東久留米市中央公民館)
1996. 3 演目を『ウェスト・サイド・ストーリー』に決定
4 東京学芸大学管弦楽団 OB・OG 及び現役の有志により
ウェストサイドストーリーオーケストラ編成
指揮者に広井隆先生を迎える
8.3～4 オーケストラとの合宿練習 (於 養護学校)
10 若竹まつりの若竹おどりにて歌と踊りを披露
11.3 小金井祭 (東京学芸大学学園祭) 参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
『ウェスト・サイド・ストーリー』コンサート
ウェストサイドストーリーオーケストラと共演
1997. 1 広報紙 GO2 ブロードウェイ発刊 (2002年10月現在 69号)
1997. 5 オーケストラとの交流会 (於 奥多摩)
1997. 8.9～10 オーケストラとの合同合宿練習 (於 養護学校)
ウェストサイドストーリーオーケストラを
若竹ミュージカルオーケストラと改称
舞台監督に宮上直也氏 (故人) を迎える
10.11 『ウェスト・サイド・ストーリー』公演 (於 三鷹市公会堂)
11.2 小金井祭 (東京学芸大学学園祭) 参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
『ウェスト・サイド・ストーリー』公演
11.23 '97山の都ふれあいコンサート参加 (於 山梨県民文化ホール)
『ウェスト・サイド・ストーリー』公演
1998. 5.3 オーケストラとの交流会 (於 養護学校)
6.14 日本発達障害学会 33 回研究大会特別公演 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
『ウェスト・サイド・ストーリー』コンサート
8.8～9 オーケストラとの合同合宿練習 (於 養護学校)
1999. 3.7 『サウンド・オブ・ミュージック』コンサート (於 東京学芸大学芸術館ホール)
5.2 オーケストラとの交流会 (於 養護学校)
8.7～8 オーケストラとの合同合宿練習 (於 中央アルプス駒ヶ根)
2000. 1.10 東京都官・ろう・養護学校総合文化祭「舞台芸術・演劇祭」特別出演
『サウンド・オブ・ミュージック』(第1幕より) 上演 (於 東京芸術劇場中ホール)
舞台監督に黒木辰男氏を迎える
3.5 『サウンド・オブ・ミュージック』(第1幕より) 公演
(於 所沢市民文化センター・ミューズ)

- 8.19～20 オーケストラとの合同合宿練習 (於 養護学校)
10.9 『サウンド・オブ・ミュージック』 全幕公演
(於 所沢市民文化センター・ミューズ)
- 11.5 小金井祭 (東京学芸大学学園祭) 参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
『サウンド・オブ・ミュージック』 全幕公演
2001. 1 次回演目を『屋根の上のヴァイオリン弾き』に決定
5.4 『サウンド・オブ・ミュージック』 全幕公演
(於 リューとぴあ新潟市民芸術文化会館・劇場)
- 8.11～12 オーケストラとの合宿練習 (於 養護学校)
11.3 若竹ミュージカル映像制作部による「ドキュメント新潟公演」完成
11.4 小金井祭 (東京学芸大学学園祭) 参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
「ドキュメント新潟公演」上映会&出演者と語る会
2002. 8.10～11 オーケストラとの合同合宿練習 (於 養護学校)
11.3 小金井祭 (東京学芸大学学園祭) 参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
『屋根の上のヴァイオリン弾き』コンサート
2003. 8.9～10 集中練習 (於 養護学校、ルネ小平)
11.2 小金井祭 (東京学芸大学学園祭) 参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
『屋根の上のヴァイオリン弾き』第一幕より
2004. 1.10 若竹会「新年会・成人式」にて、『屋根の上のヴァイオリン弾き』から一部を披露
(於：成美教育文化会館 グリーンホール)
3.28 「しずおかおもちゃ図書館開館 20 周年記念」コンサートに出演
(於 静岡市民文化会館大ホール) 『屋根の上のヴァイオリン弾き』全幕公演
8.7～8 集中練習 (於 養護学校)
10.31 小金井祭 (東京学芸大学学園祭) 参加 (於 東京学芸大学芸術館ホール)
『屋根の上のヴァイオリン弾き』全幕公演
2005. 1.23 広報紙 GO2 ブロードウェイ 100 号発刊
5.8 東京公演 (於 武蔵野市民文化会館大ホール)
『屋根の上のヴァイオリン弾き』全幕公演
「僕たちのブロードウェイ」(晩成書房) 出版

〒 203-0004

東京都東久留米市氷川台 1-6-1

東京学芸大学附属養護学校内 (電話 0424-71-5274)

若竹会

若竹ミュージカル

<http://homepage3.nifty.com/wakatakemusical/>

「すべての山に登れ」

訳詞：若竹ミュージカル

生きていくということ
それは山に登ること
悲しみや喜び
越えて夢をつかむこと
夢こそは生きるあかし
愛を守り育てちかう
川を渡り虹を追い
さあ、登ろう！
すべての山



夢こそは生きるあかし
愛を守り育てちかう
川を渡り虹を追い
さあ、登ろう！
すべての山



若竹ミュージカル